

自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0990900011		
法人名	株式会社 ファミリーホームなか		
事業所名	グループホームきぬの里		
所在地	真岡市中313番3		
自己評価作成日	平成23年2月7日	評価結果市町村受理日	平成23年4月14日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.t-kjcenter.jp/kaigosip/Top.do
----------	-------------------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社団法人 栃木県社会福祉士会
所在地	宇都宮市若草1-10-6 とちぎ福祉プラザ3階 (とちぎソーシャルワーク共同事務所内)
訪問調査日	平成23年2月25日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

認知症になっても、地域の中で家族とのつながりを大切に、今迄の生活が継続できるよう支援を行なっています。開所より4年が経過し、ご利用者様の高齢化等により車での外出の機会は減っていますが、施設の中や、地域で楽しく過ごせるよう行事食作りや、イベントの企画、地元自治会主催の行事参加を行なっております。地元小、中学生や、民話の会、踊りの会等、年間を通してボランティアの方々が訪れてくださって、ご利用者様は勿論の事、職員も心待ちにしております。又、ホームでの大きな行事には、ご参加頂き楽しい時を過ごしております。又、職員のスキルアップを目指し、職員自らが主導となり月に一度定期的に勉強会を開催し、より良い介護の実践に努めています。ご利用者の立場に立ち全ての職員が寄りそいながらの支援を心がけております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

玄関先から花があり、玄関を入ると季節感あふれる飾りがさり気なくされている。建物自体が木を沢山使用しており、壁等も木の温もりを十分感じられる造りとなっている。また、浴槽は檜風呂となっており、利用者からも「温泉のようなお風呂だよ」と自慢となっている。L字型の共有スペースがゆったりとした空間となっており、音や臭い等の衛生面にも徹底した配慮がされている。職員一人ひとりが、利用者の生い立ちを十分把握しながら「今、できること」や「寄り添えること」などを考えて介護計画が立てられ、実現可能な目標となっている。利用者だけでなく、職員同士も支え合う関係が築かれている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開所時に事業所としての基本方針、理念を定め掲げている。認知症になっても家庭的な雰囲気の中で家族や地域とのつながりを大切に、今までの生活が継続できるよう、確認し合い職員全員で共有を図っている。	施設長が原案を作成して同意を得た理念であり、「やすらぎとよろこびの日々を一人ひとりに伝えることのできる介護」と掲げており、ミーティングや会議、勉強会などで共有しながら実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入し、回覧なども回ってくる。地域の行事には、積極的に参加し、地域小中学生がボランティアの草むしりや、定期的に慰問の来所があり、入所者との交流が行なわれている。近隣の方からの野菜の差し入れ等もあり日常的に交流を図っている。	自治会長や地域のボランティアの方々がホームを訪れている。口コミで他のグループの方からも訪問したいという希望があり、積極的に受け入れを行っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症の方への理解や接し方等少しでも知っていただく為、認知症サポーター養成講座の開催や運営推進会議等を通じ理解に向けての働きかけを行なっている。中学生のマイチャレンジ、高校生の実習の受け入れも行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	サービスの状況等を会議で報告しアドバイスを頂いている。又、参加者より情報提供を頂き、地域での行事への参加等サービスに活かしている。	区長や民生委員、地域包括支援センター職員、家族が中心となり、時折市担当者も参加をしている。隣接する小規模多機能と共同で偶数月に開催している。今後は老人会や消防関係者にも参加を呼びかける予定である	ケアの向上の為には様々な立場の方の参加も重要となると思われます。また、家族も仕事をしている方が多いという状況から参加しやすい休日の開催も検討していただきたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議には、市担当職員が出席しておりホームの課題や状況を把握してもらい、円滑に進むよう助言を頂いているほか制度上の情報も頂いている。又、介護相談にも市の職員が共に訪れている。	施設長が審査会への参加協力をしたり、介護相談員の訪問も2ヶ月に1回ある。市の関係者の受け入れも積極的に行っており、協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	全職員が拘束ゼロを実践しており、拘束をしないケアに取り組んでいる。又、月一度の勉強会やミーティングを通して、理解し実践している。	マニュアルを作成しており、鍵はかけずに玄関の扉は手動となっている。また、鈴をつけながら見守りにより施錠をしない工夫を行っている。居室は利用者が鍵をかけて欲しいという訴えがあり、職員が応じて利用者不在の時に鍵をかける協力をしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員全員が認識し理解している。研修会などにも参加し、伝達研修も行なっている。又、他事業所での虐待発生事件時は、管理者より随時指導が行なわれる。		

グループホーム きぬの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修会などには参加し伝達研修を持ち理解に努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時契約書を読みながら説明を行い、疑問点には十分話し合い理解して頂けるようにし、納得して頂いてから、契約を行なっている。又、問い合わせなど随時対応し理解につなげている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議を通して随時サービス状況の報告がなされ、家族からの意見、要望などを運営に反映させている。	「家族からの連絡帳」を作成しており、ミーティングや職員間の連絡帳で全職員が周知できるようになっている。職員から具体的な提案を家族に投げかけており、一緒に改善している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者はミーティング時や、食事会等で意見や提案を聞く機会を設け、早い段階で代表者と話し合い、反映される努力をしている。	施設長の他にリーダーを置き、職員の話しやすさを追及している。殆どの場合には直接施設長へ話せる関係が築かれている。職員の誕生日には食事会を開いて親睦も深めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者との懇談の機会を設け、実践に向け話し合っていくたい。		
13		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は職員育成の重要性を認識し、内外の研修には積極的に参加を実践するように促しているが、管理者主導が実情である。内部研修等も、把握しきれていないところもある。又、OJT等を活用し新人の育成も行なっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	包括支援センターの協力の下、市内地域密着型の情報交換の場を設けて頂き、参加し意見交換を行なっている。同業者の交流とまではまだ、いかないが、今後も続けていきたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	面接時や利用開始後等、不安なことはないか耳を傾けながら少しずつ信頼関係が築いていけるよう関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	相談時や面接時に家族が何に困り、どんな要望なのかなどを探り、どんなことでも話せる雰囲気作りに努めている。又家族一人ひとりの思い等にも耳を傾けるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	初期の段階での聞き取りや、他事業所からの情報などを得て、一人ひとりの状況に応じた支援が出来る様対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	常に寄り添う支援をし本人と共に過ごす時間を大切にしている。日々の暮らしの中で得意とする場面での本人の出番を作るようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人と家族との絆を断ち切らない支援の仕方を常に考え、本人希望の外泊の支援や、家族の面会時での情報提供等常に支えあう努力をしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの方や、親類の方などの面会時は、好きな場所での接待に努め、又来て下さいなどの声かけを忘れずにし、関係が継続できるよう支援している。	顔馴染みの方の訪問を呼びかけている。しかし、高齢化している為、実際には難しい状況となっている。そこで、ホームのある地域で新たな馴染みの関係を築けるよう取り組んでいる。家族も居心地良い場所として気軽に訪問している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係が円滑に保たれるよう個々の性格等を配慮し、よい関わりが持てるよう、座席の配置など考慮している。又、職員の出番が必要な時には、利用者に影響を与えないような働きかけを行なっている。		

グループホーム きぬの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院による退所の方に対しては、その後お見舞いに伺ったりしているが、相談や支援までには至っていない。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いやりや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員全員が利用者の情報を共有し、思いや意向の確認をし、今までの生活に少しでも近づけることが出来る様努めている。本人の思いを大切にプランに生かすようにしている。困難な場合には、話し合い確認しながら、本人の意向に添うようにしている。	入居時には家庭訪問をしながら、本人の状況はもちろんのこと、家族との関係性にも着目してアセスメントを行っている。日々の気付きはミーティングで共有しながらその都度ケアの修正を行っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	それぞれの生活歴や馴染みの暮らし方等を会話の中等から理解し、それを積み重ねていき、本人の暮らし方の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりがどのように過ごし、どのようなことが出来るのかを職員全体で共有し、一日の暮らしの中で出番を多く作り、持てる力が絶えないよう努めている。又、日々変化する現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	現状に即した計画作成の為に、その時々の変化、気付き等、ミーティングでも話し合い、それぞれの意見やアイデアが反映できるプランの作成をしている。又、家族からの要望に関してしても意向に添うよう確認しながら作成している。	「自分で出来ること」「寄り添えること」への視点を大切にしながら、毎月のモニタリングを行っている。3ヶ月に1度の担当者会議では記録からも計画に反映できるような工夫がされている。計画は実践可能で、項目も3つ程度と決めて具体的である。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケアプランと連動した介護記録や、食事摂取量、排泄等個別に記録し、申し送り時に変化や気づきを伝え、共有をはかり実践につなげている。又、継続した支援が出来る様に見直しには、積み重ねた情報が生かされている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人と家族との暮らしを支え、臨機応変かつ柔軟にサービス提供が行なえるよう配慮している。		

グループホーム きぬの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の方々の招きで、地区の開催するミニデイ等に定期的に参加、又、地域のボランティアの訪問があり、馴染みとなり、毎回楽しみにしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人のかかりつけ医の受診がスムーズに出来る様受診の希望の把握に努めている。急を要する場合の協力機関への連絡など、本人や家族の意向を聞き適切な医療が受けられるよう支援している。	基本は家族が対応となっており、受診時には医師へ丁寧な手紙での情報提供書を作成して家族に渡している。また、医師からも返事があるが、直接電話で確認が気軽に出来る関係性を築いている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ホームには看護師の配置がない為、併設である小規模多機能の看護師に相談できる体制作りを行なっている。又、家族への情報も看護師から伝えることもある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。また、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時には、医療機関に、情報を提供したり、頂いたりしてケアに活かすようにしている。医療機関の相談員との連携にも努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	家族会で、話し合いを行なったが、終末期に関しては、それぞれの家族の意見がある為、本人の意向を聞き話し合いを深めていきたい。事業所としては、職員間でも本人や家族の意向に応え、入居者のその人らしい終末を迎えられる支援の取り組みを考えているが、まだ不完全である。	かかりつけ医からの提案で往診も対応出来る回答が得られている。受け入れ体制を検討している状況であり、段階的に聴き取るようにして「最後をどのように迎えるか」を家族と一緒に考えていこうと考えている。	職員は介護の集大成として看取りを捉えており、指針や体制を検討している。そこで、今後は是非、体制等について実現できるよう期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	勉強会での実施を継続的に行なっていく、実践力を身につけていけるようにしている。又、マニュアルを作成し、周知徹底を図っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の避難訓練には、消防署や、近隣の方々の協力を頂き、指導や、アドバイスを頂いている。夜間想定も行い、検討事項を職員間で共有している。又、備蓄食料に関しては、少量だが準備がある。	自治会の方が直接訓練に参加をして地域との実践的な方法で訓練が行われている。今後は地域の消防団等の協力体制が確立できるよう検討中である。	

グループホーム きぬの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	いつの時も尊厳を守り、日々の支援の中で、さり気ない言葉かけや誘導の仕方ををし、プライバシーの確保に努めている。又、勉強会でもプライバシー確保について、勉強、話し合いがもたれている。	トイレ誘導は利用者の耳元で言葉掛けをしており、言葉遣いも日々職員間で注意し合っている。プライバシーに関する研修も行いながら、「お願いする」ようにして利用者の役割りを見つけ出し、主体的に活動できるような工夫がされている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	一人ひとりの持っている希望や思いが職員全体で共有できるよう、共に過ごす時間を大切にしている。その中から思いが伝わってくるが多く、その想いを察知し、自己決定等につなげている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日々の生活の日課はある。それをこなしつつ入居者一人ひとりに添った流れで支援をしている。朝晩の就寝時間や起床時間等、入居者各々に対応している。又、外出や散歩等、希望に添った支援をしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	今迄の生活の中でのこだわりの部分を大切に、朝や入浴後の化粧、家族持参のクリーム等使用時の支援を行なっている。又、外出時や入浴後の着替え等、本人の意向を聞き共に支度をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材料の調達から手作りを旨とし、季節感を出し家庭と同じ雰囲気になるように配慮している。職員もテーブルを囲み、同じものを楽しく会話をしながら食べている。準備や後片付け等も職員と共に行なっている。	切ること、ランチョンマットをアルコールで消毒する等の役割りがあり、利用者自身が楽しんで行っている様子が伺えた。職員が一人ひとりの能力や出来る事を十分に把握して実現できている状況である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士のアドバイスを受け、栄養のバランスを考え、食べる量、形態、器等個々にあわせて提供している。又、摂取量はチェック表により職員の共有を図っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、一人ひとりに合った口腔ケアを実施し、それが習慣となっている。外部研修などにも参加し伝達、口腔ケアの重要性を認識している。		

グループホーム きぬの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	個々の排泄のパターンを把握し尿意のある方は勿論のこと、無い方も自立に向けトイレ誘導を行なっている。又、24時間排泄チェック表により時間の確認を行い、個別の排泄ケアを工夫している。	日中は全くオムツを使用しておらずトイレで排泄することを基本としている。夜間のオムツ使用の理由は介護ではなく、失禁で体調不良にならない為であり、冬季限定の使用である。オムツを使用しても時間で夜間も排泄誘導をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日定時に乳酸飲料の飲用、繊維質の多い食材やメニューの工夫等、食べ物に関する支援の他、腹部のマッサージ等、その方にあった支援をし、自然排便につなげている。下剤内服者の管理、確認も行なっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に応じた入浴の支援をしている	入浴日や時間等、ある程度決まっているが、本人に添った入浴の仕方や時間等希望や、意向に添うように支援している。	週3回の午後が目安となっており、檜風呂である為、利用者も温泉に入っているようだと話している。入りたがらない方に対しては時間をおいたり声掛けをする職員を変えたりしながら自然に入浴が出来るよう工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ベッドでの生活が馴染めない方や、習慣がない方には、畳で就寝して頂き、安眠につなげている。 午睡の習慣のある方や、その日の体調に合わせて休息の仕方を工夫している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬票の作成や処方箋の内容の確認を職員全体で把握し、処方が変更になった時は、家族や主治医に内容の確認をしている。又、変更後の状態の変化等の確認を職員間で共有できるよう、記録している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一日の生活の中で、得意とする事を職員と共に、楽しみを持って出来るように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	希望に添って、近隣への散歩に出かけたり、食材の買出しに同行し食べたいおやつやの購入等支援に努めている。初詣、花見、バラ園等に外出の際には、外食の支援もしている。	近所を30分程度散歩をしたり、週3回は買出しと一緒に出かけ、食べたいおやつを購入している。月1回は外食目当てでのドライブをしながら日常的に外出ができるよう努めている。	ホームのある場所での馴染みの関係を作ることが目標として掲げており、今後も継続して地域性を活かした外出の機会を作る取り組みを期待したい。

グループホーム きぬの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理が困難な方が多い為、ホームで小遣いを預かっている。外出時の買い物や食事の費用などの支払いに当てている。買い物では、本人がレジで支払いができるよう付き添い支援を行なっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族からの電話の取次ぎや、希望時には本人がかける事もあり、関係が継続できるよう支援している。手紙は個人宛に届くが、返事を書く支援は出来ていない為、今後は手紙がかける支援を行なっていきたい。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	不快な臭い等しないよう常に環境整備に心がけている。又、温度管理や換気等にも気を配り快適に過ごせるよう支援している。床暖房が敷設されており、穏やかな温もりが保たれている。壁には協働で作製した季節感ある貼り絵などが掲示されており、明るく落ち着いた雰囲気になるように心がけている。	換気や掃除、消毒の徹底をしており臭いや衛生面でも十分な配慮をしている。建物自体が木を沢山使用しており温もり感があり、花や飾りで季節感を出している。また、テレビや話声も小さく、音に対しての配慮も徹底している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	キッチンから流れる匂いや音などを感じながら、テーブルやソファ、サンデッキ等思い思いの場所で気のあった方との会話等が楽しめるよう支援している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に、本人や家族に使い慣れた品々を持参していただくようお願いしており、各居室にはテレビ、仏壇等の家電、家具類の他、家族の写真等が持ち込まれており、本人が安心して生活が送れるよう工夫している。	居室は3畳分が畳であり、他がフローリングの造りとなっている。持ち込みは自由となっており、家族が主体的に居室のレイアウトをしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	常に何が分からなく、どうしたら出来るかを探り、その時々に対し、自立した生活が出来る様工夫している。部屋の名前やトイレの場所等、又、身体機能の変化にも配慮している。		